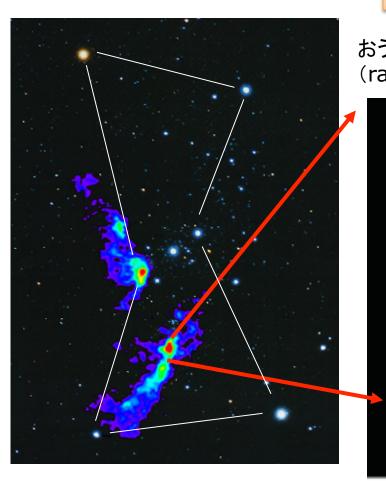
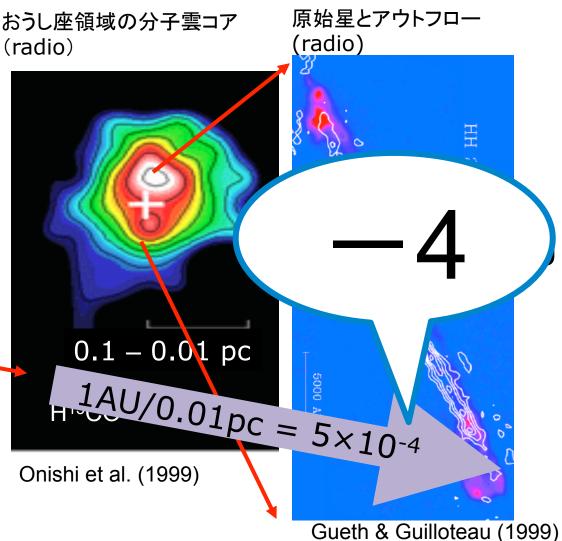
星形成のシナリオ: <u>分子雲→分子雲コア→ファーストコア→</u>原始星

AMRシミュレーションが必要である。



オリオン分子雲 (optical+radio) Sakamoto et al. (1994)



乱流と星間磁場は重要

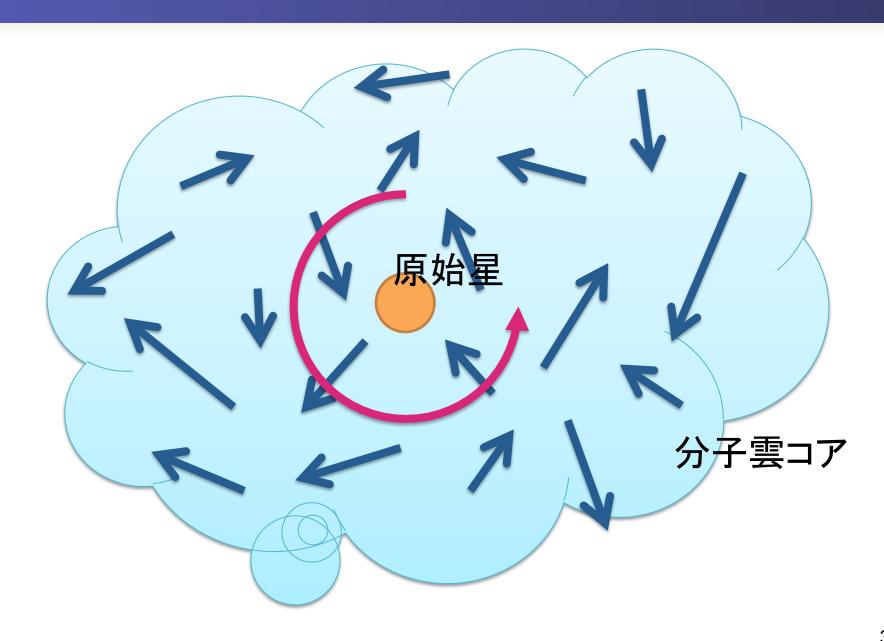
■乱流

- ■星間ガスは乱流状態
- ■分子雲(超音速乱流) → 分子雲コア(亜音速乱流)
- ■スケーリング則: Δv ∝ L^{1/2} (Larson 95)
- 乱流は回転の起源(Burkert & Bodenheimer 00)
 - ■→原始星の自転、原始惑星系円盤の回転、アウトフロー・ジェットの駆動、惑星の公転、etc.

■星間磁場

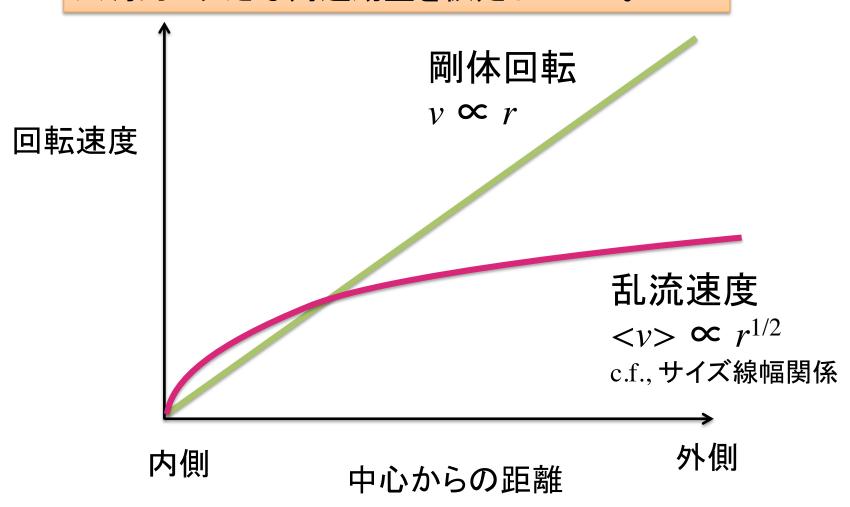
- ■磁気エネルギー~重力エネルギー
- ■強い磁場
- ■高密度で散逸過程が利く。

乱流は回転の起源 一概念図ー



乱流と剛体回転は角運動量分布が異なる

剛体回転を仮定すると、質量降着の後期段階で 人為的に大きな角運動量を仮定していた。



乱流と星間磁場は重要

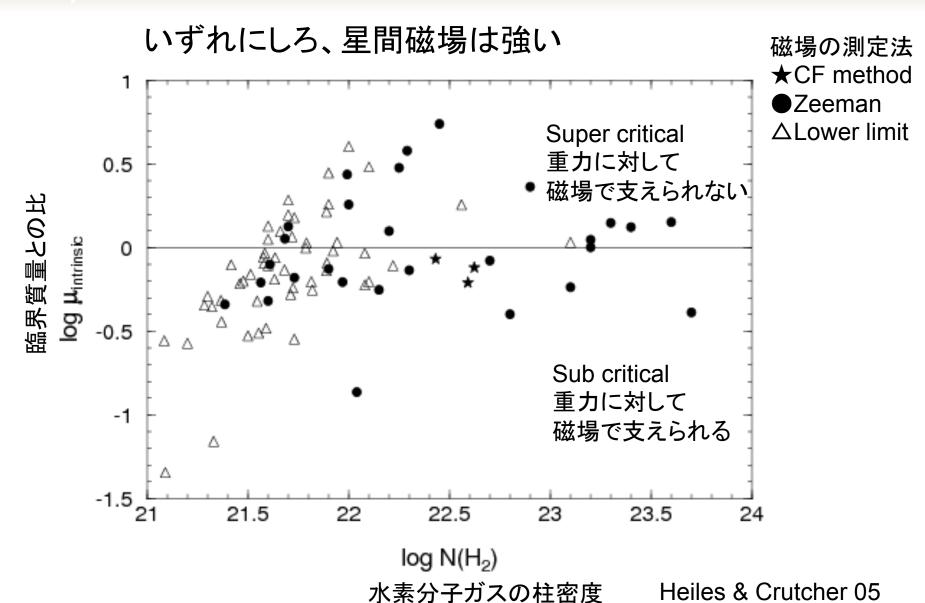
■乱流

- ■星間ガスは乱流状態
- ■分子雲(超音速乱流) → 分子雲コア(亜音速乱流)
- ■スケーリング則: Δv ∝ L^{1/2} (Larson 95)
- 乱流は回転の起源(Burkert & Bodenheimer 00)
 - ■→原始星の自転、原始惑星系円盤の回転、アウトフロー・ジェットの駆動、惑星の公転、etc.

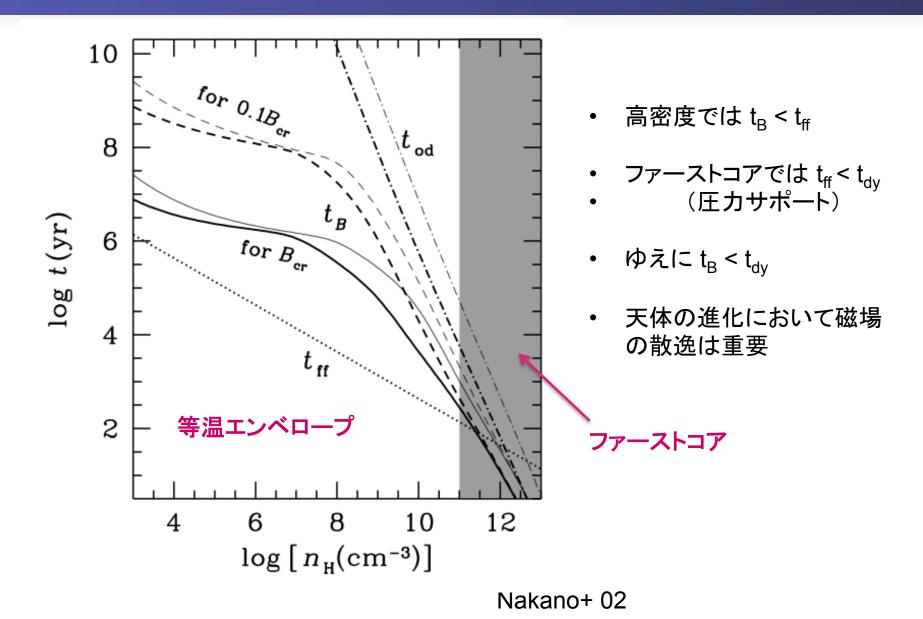
■星間磁場

- ■磁気エネルギー~重力エネルギー
- ■強い磁場
- ■高密度で散逸過程が利く。

いろいろな分子雲の磁場 Supercritical vs subcritical



磁場の散逸過程の重要性



ところが (業界の動向)

<u>乱流と磁場の両方</u>を考慮した原始星収縮のシミュレーションはまだ(ほとんど)行われていない

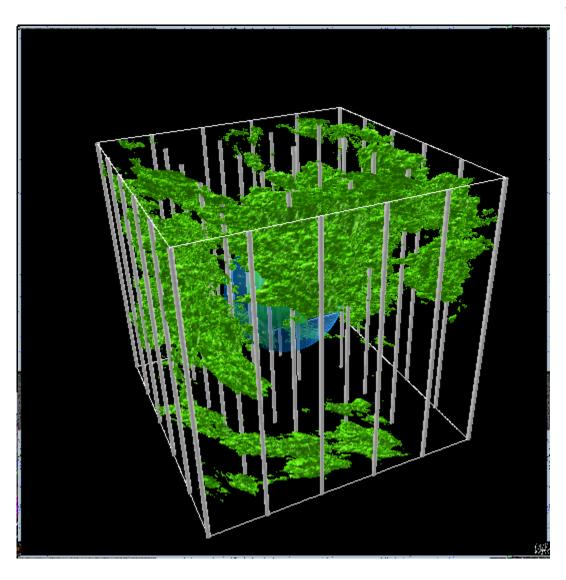
乱流·磁場·原始星収縮

→ 3次元-自己重力-MHD-AMRが必須

AMRグループ

- SFUMATO (this work) Turbulence+MHD+barotropic for low mass cores (Matsumoto+ 11)
- RAMSES Turbulence+MHD+barotropic
 for massive cores (Hennebelle+ 11)
- ORION Focus on Radiation feedback w/o magnetic field
- FLASH MHD+radiation for massive cores (Peters+ 11)
- Nested grid MHD+radiation w/o turbulence (Tomida+ 10)
- Enzo Focus on feedbak (Wang+ 10)

初期条件の設定



分子雲コアの密度

BE球×(1.25-10)倍

中心:2×10⁵個/cc

半径:0.049 - 0.14 pc

質量:1.2 - 28 M_◎

温度: 10K

磁場

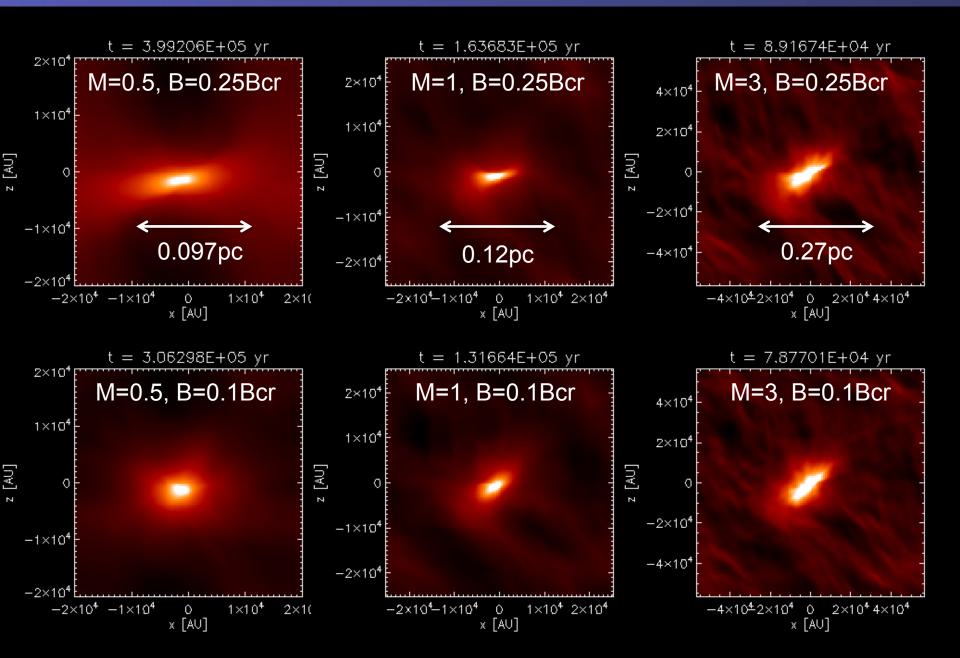
0.1, 0.25 B_{cr} 20 – 143 μG

乱流

<v²> ∝ k⁻⁴ 平均マッハ数 = 0.5, 1, 3

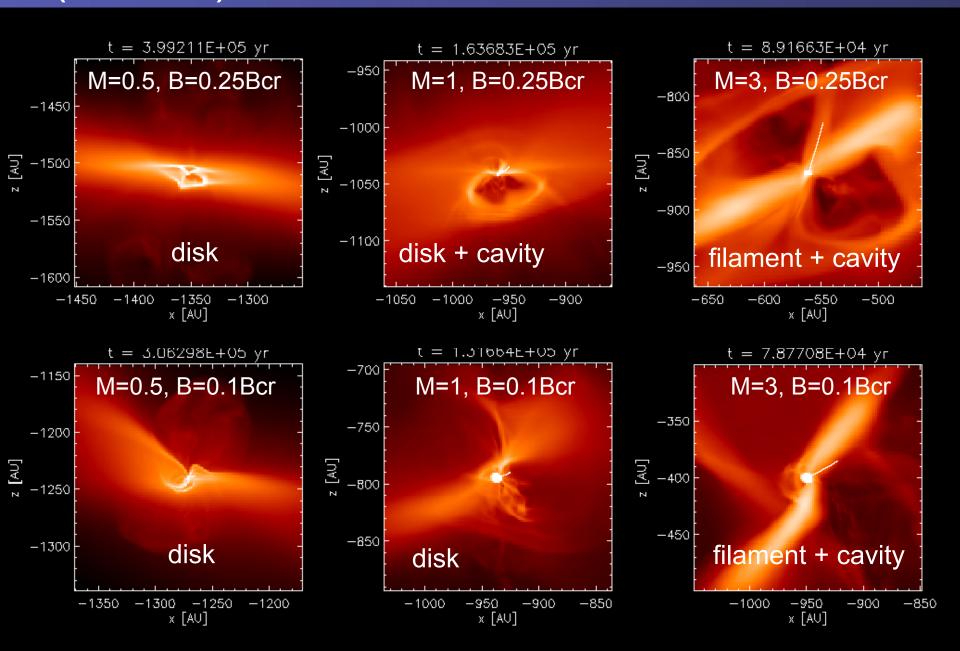
ベースグリッド: 256³ 最大グリッドレベル: 10 原始星形成後約1000年 計算時間3ヶ月

All the models on cloud core scale



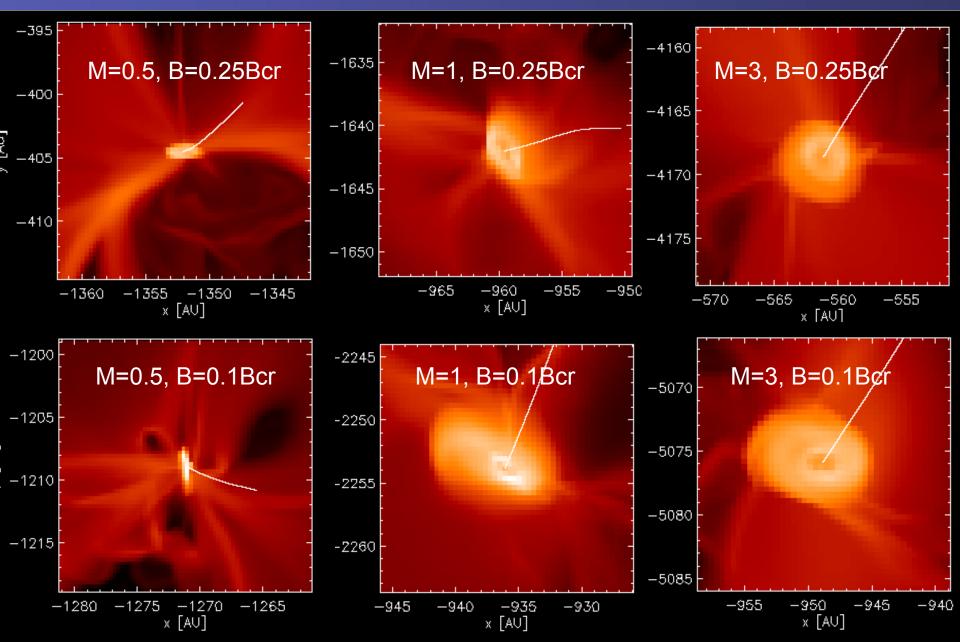
(200AU)³

Outflows are common features.

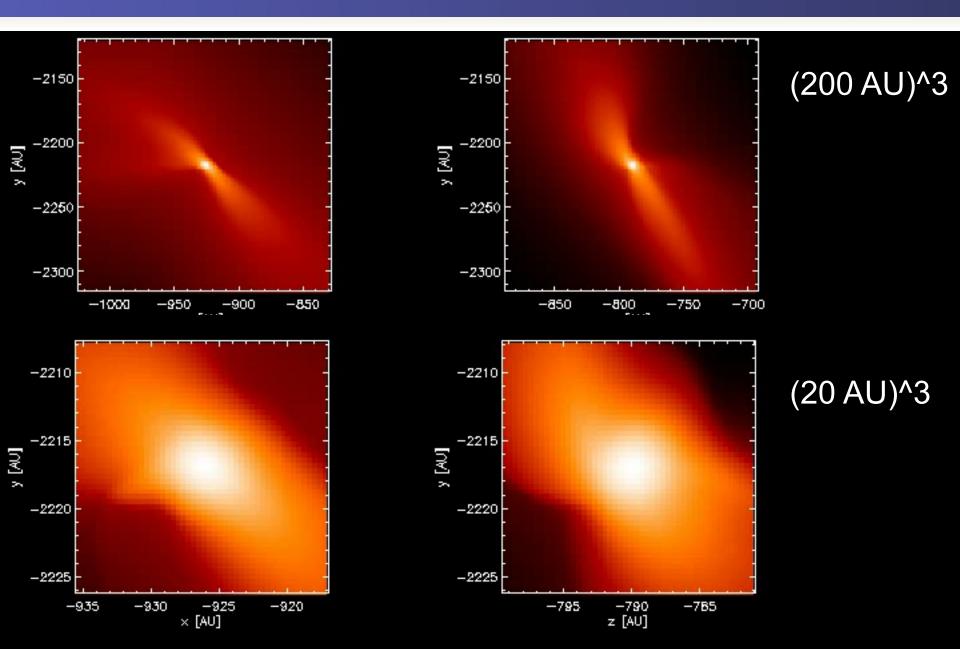


 $(20AU)^3$

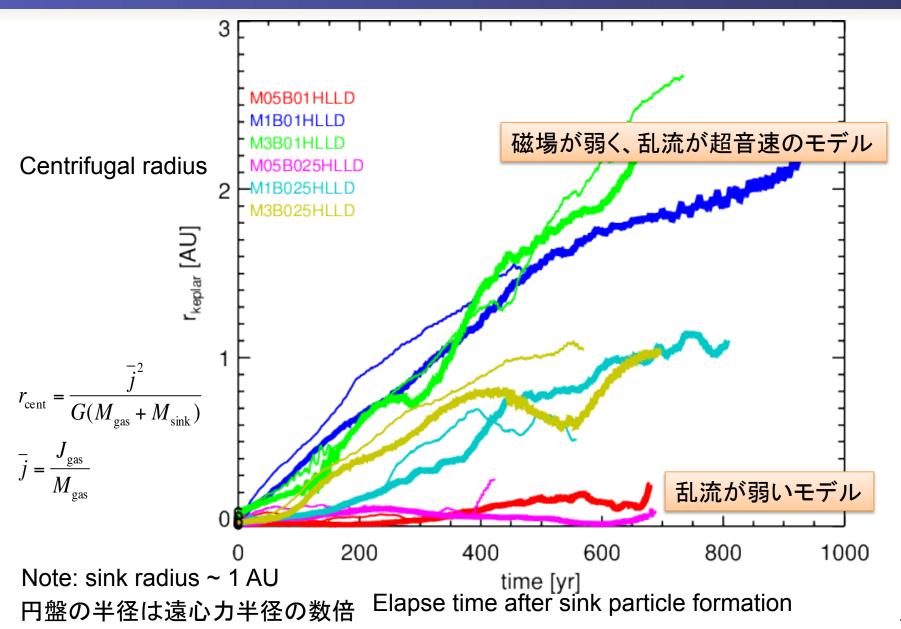
Rotating disks and/or cavitis



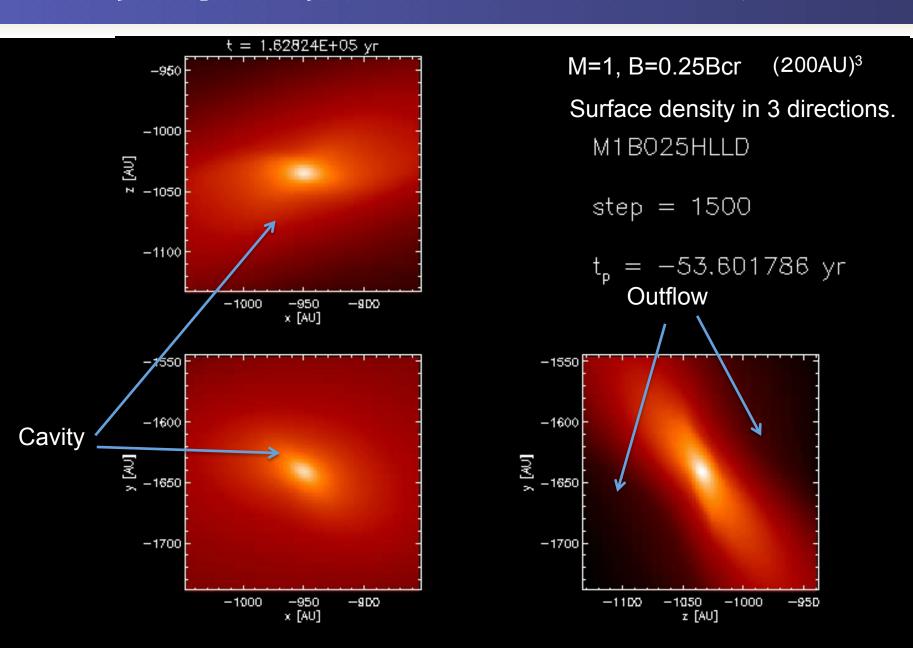
M=1, B=0.1Bcr:アウトフローと円盤形成



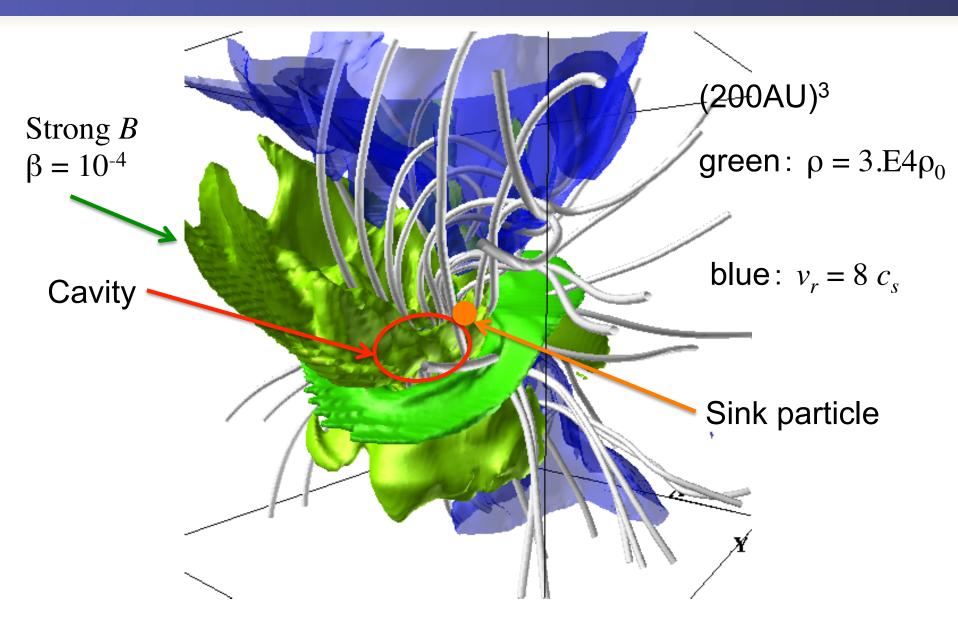
回転円盤の成長: 乱流+磁場が制御



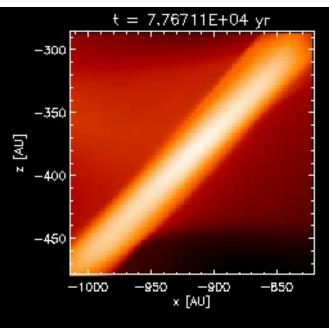
磁場が強い場合はエンベロープに穴



Cavity is filled by strong magnetic field.



エンベロープに穴: フィラメントに付随

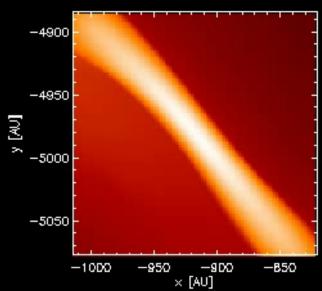


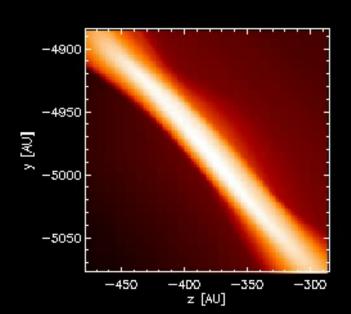
M=3, B=0.1Bcr (200AU)³
Surface density in 3 directions.

M3B01HLLD

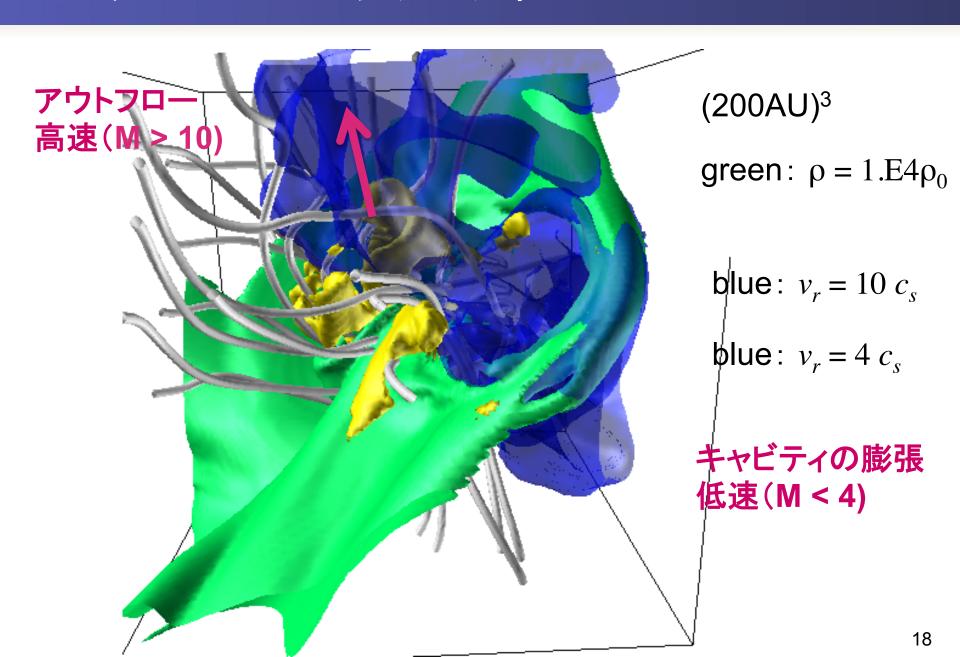
$$step = 1500$$

$$t_p = -429.06353 \text{ yr}$$





アウトフローとキャビティ



まとめ

- オーム散逸を考慮して乱流分子雲コアの原始星収縮を計 算した。
 - 原始星形(シンク粒子)成後~1,000年間
 - 工夫: AMR, シンク粒子, 陰解法
- ■アウトフローの形成
- 星周円盤の形成と成長:
 - 乱流が弱くない場合(乱流は角運動量の源)
 - 磁場が弱い場合(磁気制動が弱い)
- エンベロープに穴:
 - ■磁場が強い場合に顕著。
 - ■キャビティーは磁束の塊。
 - ■エンベロープに複雑な構造。